

編集後記

雑誌名	能楽研究：能楽研究所紀要
巻	15
ページ	214-214
発行年	1990-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020421

〔編集後記〕

本号は発行が大幅に遅れた。能楽研究所が『鴻山文庫蔵能楽資料解題』の仕事に忙殺されているためである。同書の上冊は本年三月(実際には四月下旬)に刊行したが、平成元年度はその仕事のため他は何もできない状態だった。寄贈者江島伊兵衛氏の強い要望に基づく解題付き目録の作成であるが、それが予想以上に難行であることを、所員一同が痛感している。

遅れても、夏休みの終わりに本号を発行できるつもりだったが、それもまた目算がはずれた。『鴻山文庫蔵能楽資料解題』の下冊分が上冊に数倍する時間と労力を要する大事業で、所員すべてがそれにかかりきっているためである。しかも昨年度から、以前からの念願だった太鼓観世家の資料調査に取り組み始めてもいた。所蔵者の都合が優先するこうした調査は、予定していかなくても、他の仕事に追われていても、できる時にしなくてはならない。あれやこれやで、平成二年度の能楽研究所は多忙を極めていたのである。

大鼓観世家の資料は予想を越える価値のあるものだった。その一端を紹介したのが表稿である。表自身が江戸時代の能楽史の解明を現在の研究課題の中心としていたこともあって、連載中の「車屋謡本新考」を後回しにしてこれをまとめた。それだけの価値のある有益な書状が揃っていると信ずる。

馬淵和夫博士が本年夏に東寺蔵の悉曇書の紙背から発見された貞和五年の勸進田楽に関する落首は、能楽研究史上に特筆されるべき大収穫である。博士の門弟たる田口所員の手でそれを

本号に紹介できるのは、発行遅延がもたらした望外の幸せだった。新資料発表の栄を本誌に回してくださった馬淵博士の御好意に感謝申しあげる。入稿直後に偶然外濠公園で博士にお会いしたが、大学時代お世話になった頃と変わらぬお元気な様子に驚かされ、博士よりは若い私も頑張らねばと思ったことである。狂言資料の翻刻・紹介の別稿に続いて、一週間で新出資料についての紹介と考察をまとめた田口所員は、研究展望をも西野所員と一緒に書いています。その労をねぎらいたい。

昭和63年の研究展望・能界展望は、今号には入れられなかった。研究展望をどうするか懸案は、未だに成案を得ていない。

(表章)

平成二年十二月二十日 発行

能 楽 研 究 第十五号

102 東京都千代田区富士見二一七七一
〇三三二六四九八二五、三三三四一六七二七

編集兼 野上 法政大学能楽研究所
発行者 記念

所長 表 章

印刷所 三和印刷株式会社
長野市川中島町一八二二一